

古文「自尊敬語」識別 100題ドリル

対象：高校生・大学受験生 | 著作権：誰でも古典塾 (kotennosensei.com) 無断転載禁止

はじめに

自尊敬語（自敬表現）とは、**天皇・上皇・中宮など最高位の人物が、自分自身の動作に尊敬語を使う**特殊な用法です。ふつう敬語は「作者から登場人物へ」「話し手から相手へ」向けるもの。ところが自尊敬語では、

動作する人・敬意を向ける人・敬意を受ける人がすべて同一人物（最高位の自分）になります。

これは**地の文の最高敬語（作者が天皇を高める）と混同しやすいのが最大の落とし穴**です。傍線部を次の**3タイプ（ア～ウ）**に分類しましょう。

記号	タイプ	見分けの軸
ア	自尊敬語	会話・独白で、最高位の人が 自分自身（われ・朕） の動作に尊敬語
イ	通常の尊敬語	地の文で作者が高位者を高める／会話で発話者が 他者 を高める
ウ	謙讓語	自分側の動作を低めて、向かう先の高位者を高める（奏す・申す・参る等）

鉄則 - 三つそろって初めてア。「①会話・独白の中 ②発話者が最高位 ③その動作主も発話者自身（われ・朕）」が**すべて**そろったときだけ自尊敬語。 - **地の文の尊敬語はイ**。どれほど豪華な最高敬語（させ給ふ・きこしめす）でも、作者が高位者を描いていれば、ただの尊敬語。 - **謙讓語はウ**。奏す・啓す・申す・参る・奉るなど、自分を低める語。相手（客体）が天皇でも、種類は謙讓のまま。

🎯 解き方のコツ

- まず**〔場面〕**を見る。地の文なら自尊敬語にはならない（イかう）。
- 会話・独白なら、**発話者**を確認。最高位（帝・院・中宮）でなければイかう。
- 発話者が最高位なら、**その尊敬語の動作主**を確認。「われ・朕」など発話者自身ならア。聞き手・第三者ならイ。
- 語が謙讓語（奏す・申す・参る等）ならウ**。動作主が誰でも、自分を低める語はウ。

採点表

部	問題	目標
第1部 基礎	Q1～Q20	18／20
第2部 標準	Q21～Q50	24／30
第3部 応用	Q51～Q80	21／30
第4部 入試	Q81～Q100	13／20

【第1部】基礎 (Q1～Q20)

Q1. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、この世を**思す**に飽かず」 **答え**：ア **解説**：帝が会話・独白で、自分の「思ふ」に尊敬語。動作主＝発話者＝最高位なので自尊敬語。

Q2. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、御簾の内にて月を**御覧ず**。 **答え**：イ **解説**：地の文で作者が帝を高める通常の尊敬語。自分が自分に使ってははいないのでイ。

Q3. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕大臣、事の由を**奏す**。 **答え**：ウ **解説**：「奏す」は謙譲語。自分側の動作を低めて天皇を高める。種類は謙譲なのでウ。

Q4. 次の傍線部「仰す」は、ア～ウのどれか。

〔院の仰せ〕「朕、みづから**仰す**ことあり」 **答え**：ア **解説**：院が独白で、自分の「言ふ」に尊敬語。動作主＝発話者＝最高位の自尊敬語。

Q5. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕院、池の汀を**御覧ず**。 **答え**：イ **解説**：地の文で作者が院を高める通常の尊敬語。

会話・独白ではないのでイ。

Q6. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

〔女房が中宮に〕女房、御消息を啓す。 答え：ウ 解説：「啓す」は中宮・東宮へ申し上げる謙譲語。自分を低める語なのでウ。

Q7. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

〔中宮の御言葉〕「われ、今宵はとくおはします」 答え：ア 解説：中宮が独白で、自分の動作に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位なので自尊敬語。

Q8. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕「君はいつくにおはしますぞ」 答え：イ 解説：発話者は臣下、動作主は聞き手の帝。他者を高める通常の尊敬語なのでイ。

Q9. 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕女房、御前に参る。 答え：ウ 解説：「参る」は「行く」の謙譲語。自分側の動作を低める語なのでウ。

Q10. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、夜もすがら思し召す」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の思いに最高敬語。動作主＝発話者＝最高位の自尊敬語。

Q11. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、近き人にのたまふ。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「言ふ」を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q12. 次の傍線部「申す」は、ア～ウのどれか。

〔家来が主に〕家来、ありさまを**申す**。 **答え：ウ** **解説：**「申す」は「言ふ」の謙讓語。自分側を低めて相手を高める語なのでウ。

Q13. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、この文を**御覧ず**」 **答え：ア** **解説：**帝が独白で、自分の「見る」に尊敬語。三条件がそろって自尊敬語。

Q14. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、楽の音を**きこしめす**。 **答え：イ** **解説：**地の文で作者が帝の「聞く」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

Q15. 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～ウのどれか。

〔女房が姫君に〕女房、わびごとを**聞こゆ**。 **答え：ウ** **解説：**「聞こゆ」は「言ふ」の謙讓語。自分側を低める語なのでウ。

Q16. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「朕、かくの**たまはす**」 **答え：ア** **解説：**院が独白で、自分の「言ふ」に最高敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q17. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕中宮、めでたしと**思す**。 **答え：イ** **解説：**地の文で作者が中宮の「思ふ」を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q18. 次の傍線部「奉る」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕臣、御文を**奉る**。 **答え：ウ** **解説：**献上の「奉る」は謙讓語。自分側の動作を低めて帝を高めるのでウ。

Q19. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、天の下をきこしめす」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の「治む」に尊敬語。三条件がそろって自尊敬語。

Q20. 次の傍線部「召す」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、楽人を召す。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「呼ぶ」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

【第2部】標準（Q21～Q50）

Q21. 次の傍線部「承る」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が〕臣、仰せを承る。 答え：ウ 解説：「承る」は「聞く・受く」の謙譲語。自分側の動作を低める語なのでウ。

Q22. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔中宮の独白〕「われ、いかにせむと思す」 答え：ア 解説：中宮が独白で、自分の「思ふ」に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q23. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕上、絵を取り出でて御覧ず。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝（上）を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q24. 次の傍線部「まうづ」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕女房、寺にまうづ。 答え：ウ 解説：「まうづ」は「行く」の謙譲語（参詣）。自分側を低める語なのでウ。

Q25. 次の傍線部「仰す」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、重ねて**仰す**べし」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の「言ふ」に尊敬語。三条件がそろう自尊敬語。

Q26. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕「君はいつの**たまふ**や」 答え：イ 解説：発話者は臣下、動作主は聞き手の帝。他者を高める通常の尊敬語なのでイ。

Q27. 次の傍線部「仕うまつる」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕家人、よろづを**仕うまつる**。 答え：ウ 解説：「仕うまつる」は「仕ふ」の謙譲語。自分側の動作を低める語なのでウ。

Q28. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「われ、しばし山に**おはします**」 答え：ア 解説：院が独白で、自分の動作に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q29. 次の傍線部「大殿籠る」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、夜ふけて**大殿籠る**。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「寝（ぬ）」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

Q30. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

〔女房が東宮に〕女房、御事情を**啓す**。 答え：ウ 解説：「啓す」は東宮・中宮へ申し上げる謙譲語。自分側を低める語なのでウ。

Q31. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、あはれと**思し召す**」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の思いに最高敬語。三条件がそろう自尊敬語。

Q32. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕院、申し文をきこしめす。 答え：イ 解説：地の文で作者が院の「聞く」を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q33. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が〕大納言、勝負の数を奏す。 答え：ウ 解説：「奏す」は天皇へ申し上げる謙讓語。自分側を低める語なのでウ。

Q34. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔中宮の独白〕「われ、いま一度御覧ず」 答え：ア 解説：中宮が独白で、自分の「見る」に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q35. 次の傍線部「召す」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、笛の名手を召す。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「呼ぶ」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

Q36. 次の傍線部「申す」は、ア～ウのどれか。

〔女房が大臣に〕女房、わけを申す。 答え：ウ 解説：「申す」は「言ふ」の謙讓語。自分側を低めて相手を高めるのでウ。

Q37. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、今ぞのたまはす」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の「言ふ」に最高敬語。三条件がそろって自尊敬語。

Q38. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕院、つねに南殿におはします。 答え：イ 解説：地の文で作者が院の「あり」を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q39. 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕殿上人、内裏に**参る**。 答え：ウ 解説：「参る」は「行く」の謙讓語（参内）。自分側を低める語なのでウ。

Q40. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「われ、口惜しと**思す**」 答え：ア 解説：院が独白で、自分の「思ふ」に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q41. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕「君はこれを**御覧ず**や」 答え：イ 解説：発話者は臣下、動作主は聞き手の帝。他者を高める通常の尊敬語なのでイ。

Q42. 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～ウのどれか。

〔自分が女房に〕われ、つてに**聞こゆ**。 答え：ウ 解説：「聞こゆ」は「言ふ」の謙讓語。動作主が自分でも種類は謙讓なのでウ。

Q43. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔中宮の独白〕「われ、よく**きこしめす**」 答え：ア 解説：中宮が独白で、自分の「聞く」に尊敬語。三条件がそろった自尊敬語。

Q44. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、うち笑みて**のたまふ**。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「言ふ」を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q45. 次の傍線部「奉る」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が院に〕臣、御琴を**奉る**。 答え：ウ 解説：献上の「奉る」は謙讓語。自分側の動作を低めて院を高めるのでウ。

Q46. 次の傍線部「仰す」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「われ、かやうに**仰す**」 答え：ア 解説：院が独白で、自分の「言ふ」に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q47. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕中宮、いとほしと**思す**。 答え：イ 解説：地の文で作者が中宮の「思ふ」を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q48. 次の傍線部「承る」は、ア～ウのどれか。

〔自分が〕われ、院の仰せを**承る**。 答え：ウ 解説：「承る」は「受く・聞く」の謙譲語。自分側の動作を低める語なのでウ。

Q49. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、今日は内にお**はします**」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の「あり」に尊敬語。三条件がそろう自尊敬語。

Q50. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、人々の歌を**きこしめす**。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「聞く」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

【第3部】応用 (Q51～Q80)

Q51. 次の傍線部「させ給ふ」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、御簾を上げ**させ給ふ**。 答え：イ 解説：最高敬語でも、地の文で作者が帝を高めるなら通常の尊敬語。豪華さに惑わされずイ。

Q52. 次の傍線部「せ給ふ」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、みづから出で**せ給ふ**」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の動作に最高敬語。動作主＝発話者＝最高位なので自尊敬語。

Q53. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕われ、まことを**奏す**。 答え：ウ 解説：相手が天皇でも「奏す」は謙譲語。自分側を低める語なので種類はウ。

Q54. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔中宮が女房に〕「帝こそ、よく**思す**らめ」 答え：イ 解説：発話者は中宮（最高位）だが、動作主は第三者の帝。自分の動作ではないのでイ。

Q55. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

〔帝が群臣に〕「われ、すでに**のたまふ**」 答え：ア 解説：帝が発話し、その「言ふ」の動作主も帝自身。三条件がそろう自尊敬語。

Q56. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

〔女房が中宮に〕われ、ありさまを**啓す**。 答え：ウ 解説：「啓す」は中宮へ申し上げる謙譲語。動作主が自分でも種類はウ。

Q57. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕院、御前の梅を**御覧ず**。 答え：イ 解説：地の文で作者が院の「見る」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

Q58. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔中宮の独白〕「われ、つらしと**思す**」 答え：ア 解説：中宮が独白で、自分の「思ふ」に尊敬語。三条件がそろう自尊敬語。

Q59. 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。

〔自分が〕われ、御前に**参る**。 答え：ウ 解説：「参る」は「行く」の謙譲語。動作主が自分でも、自分を低める語なのでウ。

Q60. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕「君は何を**思す**ぞ」 答え：イ 解説：発話者は臣下、動作主は聞き手の帝。他者を高める通常の尊敬語なのでイ。

Q61. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、天の下を**きこしめす**」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の「治む」に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q62. 次の傍線部「申す」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が〕臣、わびを**申す**。 答え：ウ 解説：「申す」は「言ふ」の謙譲語。自分側を低めて相手を高めるのでウ。

Q63. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、おもむろに**のたまはす**。 答え：イ 解説：最高敬語でも、地の文で作者が帝を高めるなら通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

Q64. 次の傍線部「仰せらる」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「われ、かさねて**仰せらる**」 答え：ア 解説：院が独白で、自分の「言ふ」に尊敬語。三条件がそろって自尊敬語。

Q65. 次の傍線部「奉る」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕臣、御文を**奉る**。 答え：ウ 解説：献上の「奉る」は謙譲語。自分側の動作を低めて帝を高めるのでウ。

Q66. 次の傍線部「大殿籠る」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、はや大殿籠る。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「寝」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

Q67. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、いま一度御覧ず」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の「見る」に尊敬語。三条件がそろって自尊敬語。

Q68. 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～ウのどれか。

〔女房が姫に〕女房、ことよしを聞こゆ。 答え：ウ 解説：「聞こゆ」は「言ふ」の謙譲語。自分側を低める語なのでウ。

Q69. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔女房が語る〕中宮、もの心細しと思す。 答え：イ 解説：地の文（女房の語り）で中宮の「思ふ」を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q70. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「われ、ねむごろに思し召す」 答え：ア 解説：院が独白で、自分の思いに最高敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q71. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が〕蔵人、御返りを奏す。 答え：ウ 解説：「奏す」は天皇へ申し上げる謙譲語。自分側を低める語なのでウ。

Q72. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕院、北の対におはします。 答え：イ 解説：地の文で作者が院の「あり」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

Q73. 次の傍線部「のたまふ」は、ア～ウのどれか。

〔中宮の独白〕「われ、しかの**たまふ**」 答え：ア 解説：中宮が独白で、自分の「言ふ」に尊敬語。三条件がそろって尊敬語。

Q74. 次の傍線部「まうづ」は、ア～ウのどれか。

〔自分が〕われ、御堂に**まうづ**。 答え：ウ 解説：「まうづ」は「行く」の謙譲語（参詣）。動作主が自分でも種類はウ。

Q75. 次の傍線部「召す」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、御車を**召す**。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「取り寄す」を高める通常の尊敬語。会話ではないのでイ。

Q76. 次の傍線部「せ給ふ」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、みづから定め**せ給ふ**」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の動作に最高敬語。三条件がそろって尊敬語。

Q77. 次の傍線部「承る」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が〕われ、勅を**承る**。 答え：ウ 解説：「承る」は「受く・聞く」の謙譲語。自分側の動作を低める語なのでウ。

Q78. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕「君は楽を**きこしめす**や」 答え：イ 解説：発話者は臣下、動作主は聞き手の帝。他者を高める通常の尊敬語なのでイ。

Q79. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「われ、なほ**御覧ず**」 答え：ア 解説：院が独白で、自分の「見る」に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位の尊敬語。

Q80. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

〔女房が東宮に〕女房、御祝ひを啓す。 答え：ウ 解説：「啓す」は東宮・中宮へ申し上げる謙讓語。自分側を低める語なのでウ。

【第4部】入試 (Q81～Q100)

Q81. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、文を取り寄せさせ給ひて、こまやかに御覧ず。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の動作を高める通常の尊敬語。最高敬語が連なっても自敬ではないのでイ。

Q82. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔帝の詔〕「朕、民の憂へを深く思す」 答え：ア 解説：帝の詔（発話）で、自分の「思ふ」に尊敬語。動作主＝発話者＝最高位の自尊敬語。

Q83. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕大臣、ひざまづきて事の由を奏す。 答え：ウ 解説：相手が天皇でも「奏す」は謙讓語。自分側を低める語なので種類はウ。

Q84. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「われ、世を捨てむと、年ごろ思し召す」 答え：ア 解説：院が独白で、自分の思いに最高敬語。会話・発話者・動作主の三条件がそろって自尊敬語。

Q85. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔中宮が女房に〕「帝は今ぞきこしめすらむ」 答え：イ 解説：発話者は中宮（最高位）だが、動作主は第三者の帝。自分の動作ではないのでイ。

Q86. 次の傍線部「啓す」は、ア～ウのどれか。

〔女房が中宮に〕女房、夜の御殿のありさまを啓す。 答え：ウ 解説：「啓す」は中宮へ申し上げる謙讓語。自分側を低める語なのでウ。

Q87. 次の傍線部「きこしめす」は、ア～ウのどれか。

〔帝の宣命〕「われ、四方の国をきこしめす」 答え：ア 解説：帝が宣命（発話）で、自分の「治む」に尊敬語。三条件がそろそろ自尊敬語。

Q88. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、御几帳のうちより、しめやかにのたまはす。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の「言ふ」を高める最高敬語。会話ではないので通常の尊敬語、イ。

Q89. 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕上達部、われ先にと内裏に参る。 答え：ウ 解説：「参る」は「行く」の謙讓語（参内）。自分側を低める語なのでウ。

Q90. 次の傍線部「大殿籠る」は、ア～ウのどれか。

〔中宮の御言葉〕「われ、今宵は早く大殿籠る」 答え：ア 解説：中宮が発話で、自分の「寝」に尊敬語。動作主＝発話者＝最高位の自尊敬語。

Q91. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕「君は明日いづくにおはしますぞ」 答え：イ 解説：発話者は臣下、動作主は聞き手の帝。他者を高める通常の尊敬語なのでイ。

Q92. 次の傍線部「承る」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が〕われ、院の仰せをかしこまりて承る。 答え：ウ 解説：「承る」は「受く・聞く」の謙讓語。自分側の動作を低める語なのでウ。

Q93. 次の傍線部「のたまはす」は、ア～ウのどれか。

〔帝の独白〕「われ、群臣を集めて、みづからのたまはす」 答え：ア 解説：帝が独白で、自分の「言ふ」に最高敬語。三条件がそろう自尊敬語。

Q94. 次の傍線部「思し召す」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、いとあはれと思し召す。 答え：イ 解説：地の文で作者が帝の思いを高める最高敬語。会話ではないので通常の尊敬語、イ。

Q95. 次の傍線部「奏す」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が帝に〕宰相、勝負の負けわざのことを奏す。 答え：ウ 解説：「奏す」は天皇へ申し上げる謙讓語。自分側を低める語なのでウ。

Q96. 次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

〔院の独白〕「われ、この絵をなほ御覧ず」 答え：ア 解説：院が独白で、自分の「見る」に尊敬語。発話者＝動作主＝最高位の自尊敬語。

Q97. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔女房が語る〕帝、いとほしと思すさま、こよなし。 答え：イ 解説：地の文（女房の語り）で帝の「思ふ」を高める通常の尊敬語。自敬ではないのでイ。

Q98. 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～ウのどれか。

〔臣下が大臣に〕われ、つてに事のよしを聞こゆ。 答え：ウ 解説：「聞こゆ」は「言ふ」の謙讓語。自分側を低めて相手を高めるのでウ。

Q99. 次の傍線部「思す」は、ア～ウのどれか。

〔帝の詔〕「朕、年ごろ此の事を思す」 答え：ア 解説：帝の詔（発話）で、自分の「思ふ」に尊敬語。三条件がそろう自尊敬語。

Q100. 次の傍線部「おはします」は、ア～ウのどれか。

〔地の文〕帝、御物忌みにて、内裏にのみ**おはします**。 **答え：イ** **解説**：地の文で作者が帝の「あり」を高める通常の尊敬語。会話ではないので自敬ではなくイ。

採点と振り返り

部	問題数	あなたの正答数
第1部 基礎	20	/20
第2部 標準	30	/30
第3部 応用	30	/30
第4部 入試	20	/20
合計	100	/100

まちがえた問題は、次の3点にもどって確認しましょう。

1. 〔場面〕は地の文か、会話・独白か。地の文なら、どんな敬語でも自尊敬語（ア）にはなりません。
2. 発話者はだれか。帝・院・中宮など最高位でなければ、ア（自尊敬語）はありえません。
3. その動作主は発話者自身か。「われ・朕」なら自尊敬語（ア）。聞き手や第三者ならイ。語が謙譲語（奏す・申す・参る等）なら、動作主が誰でもウ。

自尊敬語（ア）は「会話・独白／発話者が最高位／動作主も発話者自身」の三つがそろったときだけ。地の文の豪華な最高敬語にだまされないことが、得点への近道です。